

## 論文

# ジョージ・ミュラーの思想形成における フランケの敬虔主義の影響について

——ハレを舞台にした歴史的邂逅——

木原活信<sup>†</sup>

**要約：**本稿では、ブリストルの孤児院創設者ジョージ・ミュラーの思想形成上におけるフランケの敬虔主義の影響について議論したものである。これまで、ミュラー独特のキリスト教的世界観とその孤児院事業が、通常の世俗の社会事業とは一線を画していたことから、ミュラーの孤児院創設の経緯は個人の信仰の側面として理解され、ほとんど社会事業史のなかで位置づけられてこなかった。しかし自叙伝、日誌等の原資料を丹念に分析すると、ミュラーの孤児院創設の着想は神からの「直接啓示」というようなものではなく、実際にはフランケが創設したハレの孤児院にその原型があることは明らかである。本稿ではハレを舞台にしたミュラーとフランケという二人のドイツ人にみられる歴史的邂逅を明らかにした。

**キーワード：**ジョージ・ミュラー、アウグスト・フランケ、ブリストル孤児院、キリスト教社会福祉、敬虔主義

## 目次

1. はじめに
2. ミュラーのブリストル孤児院創設の背景
  - 2-1. プロフィール
  - 2-2. 回心
  - 2-3. 「ブラザレン」運動
  - 2-4. 孤児院創設
  - 2-5. 世界宣教
3. フランケの孤児院事業および敬虔主義
  - 3-1. 敬虔主義
  - 3-2. 『履歴書』
  - 3-3. 回心
  - 3-4. フランケ学園
4. ミュラーとフランケの歴史的邂逅
5. 結語

<sup>†</sup>同志社大学社会学部教授

\*2018年9月27日受付，2018年10月1日掲載決定

## 1. はじめに

「日本のミュラーにならんと欲す」と述べ、それを文字通り実践したのは石井十次であった。つまり、石井の岡山孤児院の原型（ロールモデルあるいはプロトタイプ）が、ブリストルの孤児院創設者のジョージ・ミュラー（George Müller, 1805～1898）であったことはすでに明らかにしてきたところである（木原, 1999）。ところで、そのミュラーの孤児院創設にも、実際的な原型というようなものはなかったのだろうか。

これまでの先行研究ではミュラー独特のキリスト教的世界観とその孤児院事業は、通常の慈善事業や社会事業とは一線を画していたことから、孤児院創設が信仰的なものとして語られ、あまりこの点については社会事業史の文脈では明らかにされてこなかった。つまり、しばしばミュラー主義と言われる「祈りへの応答」「神の導き」等という信仰面に還元されて、社会事業史における具体的な孤児院の着想に関しては等閑視されてきたと言える。

確かにミュラー自身が、孤児院事業は「神の事業」であることを旗印にしているゆえにそのことが強調されるのは当然であろうが、しかし彼の原資料を丹念に吟味すると孤児院事業開設への着想はいわゆる神からの「直接啓示」という神秘的なものではなく、実際的な原型というものが明確に存在したことがわかる。結論を先取りすれば、それはドイツのハレ大学教授のフランケ（August Hermann Francke, 1663～1727）と彼が創設した孤児院事業である。

本稿では、この経緯を原資料から再吟味、整理することを通して、ミュラーの孤児院の原型、あるいは源流の一端を明らかにしていきたい。時代的にはおよそ1世紀以上の差があるものの、ドイツのハレ（Halle）という都市が結んだミュラーとフランケというドイツ（プロシア）人にみられる歴史的邂逅を踏まえつつ、その共通点をも明らかにしていくこととする。

## 2. ミュラーのブリストル孤児院創設の背景

以下では、ミュラーの残した“The Life of Trust: Being a Narrative of the Lord’s Dealings with George Müller”; “A Narrative of Some of the Lord’s Dealings with George Müller”（以下、「自叙伝」「事業報告書」または Müller, Narrative & Autobiography と略記）<sup>(1)</sup>をもとに、その生涯と事業の概要をフランケとの共通点を中心にまず明らかにしておきたい。合わせてピアソンの伝記（Pierson, 1899）も併行して参照している。

## 2-1. プロフィール

ミュラーは、プロシア（ドイツ）のクロッペンスタッド（Kroppenstaed）に1805年に国税局の役人であった父（Johann Friedrich Müller）と母（Sophie Eleonore Müller）のもとに生まれた。1898年に93歳で亡くなるまで、およそ一世紀間を孤児院事業に尽力するなど「信仰の生涯」を送ったと言われる「伝說的」な人物として知られている。特に、ブリストルでの孤児院はのべ10,024人の孤児を、一切、国家、世俗の裕福な篤志家にたよらず、ただ神に頼り、信仰によって支えた「奇跡」的の事業であったとされている（Pierson, 1899: 301）。一ペンスにいたる金額を正確に記した「事業報告書」によると、彼が生前に得た献金総額は約£1,500,000（現在価格では£86,000,000 = 129億円）という高額（Müller, Narrative & Autobiography; Pierson, 1899）もさることながら、そのすべてがキリスト者からの自発的献金によるものであり、匿名であったなどというその方法も異色であり、極めてユニークであり、世俗の社会事業家とは隔絶している。

## 2-2. 回心

このような彼の生涯は、「回心」をめぐって転機がはっきりしている。青少年時代は、自叙伝によると「悪」の限りを尽くした「不良」少年として生きてきたことが強調されている。少年時代には習慣的飲酒、窃盗も常習であったようである。ついには17歳（1821年）で、数か月間にわたって投獄された経験すらもっている。罪状は、ホテル費用を払わなかったとなっている（Pierson, 1899）。それほどの「罪人」「悪人」であった少年時代を過ごしたと述懐している（Müller, Narrative & Autobiography; Pierson, 1899）。

回心を通じた人生の転換は、ハレ大学（Halle）神学部の在学中に起こった。ところが、そもそも彼がハレ大学の神学部に入学したのは信仰的覚醒からではなく、極めて「不純な動機」であったと述べている（Müller, Narrative & Autobiography）。というのが、当時のドイツではもっとも尊敬され、安定した収入を得ることができる仕事の一つがドイツ国教会（ルター派）の牧師（聖職者）になることであったようであり、ミュラーの職業観も同様で、特に召命があったわけではなかった。これは後述するフランケも同様であった。したがって、表向きは改心した彼は、ずば抜けた知性の持ち主でもあったので、父親にすすめられるままにハレ大学神学部に入学し、「牧師職」を目指して神学を学ぶことになった。しかしながら、その当時、本音のところでは「神を（本当には）信じていなかった」と告白している（Pierson, 1899; Müller, Narrative & Autobiography）。

あくまで机上で知識としての神学を学び、説教術を学んでいたというのであるが、この神学生時代に突然の転機が訪れた。それは1825年の20歳のときに友人のベータ

(Beta) に勧められて、ワグナー (Wagner) 家で行われていた敬虔主義の「聖書の集会」に参加したときであった。そこは、参加者が聖書を学び、聖霊に導かれるままに静かに祈るという素朴な集まりがもたれていた。ミュラーは、そこで跪いて謙虚に頭を垂れて真心から祈るキリスト信徒の敬虔な姿に圧倒された (Pierson, 1899; Müller, Narrative & Autobiography)。そして「本当」の信仰とは何かについて省察させられることになったという。一方で、神学を学び、説教の訓練を受けてはいたが、この素朴で敬虔な信徒たちのように「実は神を本気で信じていない」ことを強く自覚させられ、それが強烈な罪の意識となっていった。その出来事を契機に、神を本気で求めるようになり、最終的に自分の罪を認め、「回心」して神を信じるに至り、あらゆる罪を清算して「真の」キリスト者となったと告白している (Müller, Narrative & Autobiography)。

ミュラーにとって、この回心は、劇的な変化となり、すぐに海外宣教の志が与えられるようになる。実際、この志はこの時は必ずしも実現せずに、70歳を過ぎた晩年に実現し、文字通り海外宣教に駆け回ることとなる。まずは大学卒業後、ある団体の派遣で1828年にユダヤ人宣教の働きに参加するために宣教師としてイギリスへ渡る。しかしその宣教団体と方針が合わなくなり、ミュラーは独立宣教師の道を模索するようになる。そのようななかで、奇しくも同じ頃にイギリスのプリマスで始まっていたブラザレン運動 (諸集会の信徒たち) と出会うことになった。そしてそのメンバー (聖職者としてではない) の一人としてこの集会 (群れ) に参加するようになり、その後生涯にわたり、ブラザレン運動において強力なリーダーシップを発揮することになる (Müller, Narrative & Autobiography)。

### 2-3. 「ブラザレン」運動

ブラザレン運動は、学術上の定義は難しいが、イギリスのプリマスにおいて英国国教会の牧師を辞した神学者ネルソン・ダービ (John Nelson Darby, 1800~1882) らを「リーダー」として半ば自然発生的に19世紀初頭にはじまったとされる。当初は使徒時代の教会 (集会) の在り方に回帰して、無宗派としての集い (エクレシヤ) を求めて「聖書に立ち返ろう」とする一つの信仰復興運動でもあった (Coad, 1976)。このような動機で、国教会などの既存の教会から出て、聖書に基づく純粋な信仰を求めた人々によって世界の各地域に同様の「集会」が形成されて急速に拡大していった。基本的に聖職者制度をもたない信徒たち (ブラザレン) だけの「集まり (群れ)」であることが一つの特徴である。それゆえに他者からその名称、「ブラザレン」(兄弟たち、信徒たち) と呼ばれるようになった。これらの働きについて、その一連の運動としての理解 (→ブラザレン運動) と、結果的にそれによって生じた「→諸集会」(「ブラザレン派」) というセクト (派) を指すという見解に分かれて、今日にいたっている (Coad, 1976)。現在で

も当事者は自らを「ブラザレン」という一つの宗派であることを強く否定するのも特徴的であるが、事実上、「キリスト集会」あるいは「ブラザレン」として世界的な拡がりを見せており、日本にも120ほどの集会があるとされている。

さて、ミュラーはメアリー（Mary Groves, 1797～1870）と1830年に結婚することになるが、彼女の兄は、初期のブラザレン運動の「リーダー」であり、バクダット宣教にいったグローブ（Anthony Norris Groves, 1795～1953）である。ミュラーは1932年（27歳）にブラザレン運動の同志となるヘンリー・クレイク（Henry Craik, 1805～1966）ら7人で、国教会から出た信徒たちとベテスタ集会（Bethesda Chapel）を開始する。ここではブラザレン運動の伝統に基づき、いわゆるミュラー自身は「牧師」の「資格」がありながらも、「サラリー付きの職業牧師」であることを固く拒否して、教会（集会）から一定の給与を受けることを生涯放棄して自給伝道者として生きることになる。亡くなる直前で、のべ1200人（その後10の諸集会に株分け）からなる信徒の集会となり、ミュラーはクレイクとともにベテスタ集会を牧会した。ここではクエーカーの礼拝方式と似たように、聖霊の示されるままに導かれた者が聖書からメッセージを語り、週ごとに「パン裂き」（聖餐式）を行うなど、使徒時代の教会を彷彿させる伝統を保持するユニークな集会であった（Coad, 1976; Müller, Narrative & Autobiography）。

また1834年にはミュラーとクレイクは、聖書知識協会（Scriptural Knowledge Institution for Home and Abroad）を設立して、その団体によって国内外の宣教を支援するとともに、後に設立することになるブリストルの孤児院をも財政的に支援した。中国宣教で有名なハドソン・テラー（Hudson Taylor, 1832～1905）などもその支援によって宣教を行っている一人である。

## 2-4. 孤児院創設

このような経緯を経て、ミュラーは1836年（31歳）に、孤児院をブリストルではじめることになる（Müller, Narrative & Autobiography）。個人的には、その前年に義父グローブス、息子のエリヤ（Elijah）を亡くすなどの危機があったが、この年に孤児院事業構想を同志であるクレイクに相談しつつ、それを「祈り始めた」ことをベテスタ集会の信徒たちに明らかにしている（Müller, Narrative & Autobiography）。なぜ、そもそも孤児院創設なのかという点が、やや唐突感が否めない点であるが、その着想については、自明のように信仰による「祈りの応答」であるとだけ伝えられて、あまり注視されることがなかった。しかし、実質上、ハレのフランケの孤児院がモデルとなっていることは明らかであるが、このことは後述する。

そして後に1846年には、より広大な土地であるアシュリーダウン（Ashley Down）に移転して、ここを本拠地として新たに5つの孤児院を建て、それを運営するなど大規

模事業となって発展していった。貧しい子供たちの学校も併せて持つにいたる。そこでは聖書を教えることを基本として、手に職を身に着けさせる実務的技術教育も行ってた。

その事業の運営方式は極めてユニークであった。ミュラー主義の原点とされる、「人間の事業」ではなく「神の事業」であることを証明するために、世俗に一切頼らない、国家に一切頼らない、一切の借金をしない、一切の定額の給与をもらわない、などの独特の運営方針であった。そのような運営のため、あるときは、孤児院の子供たちを食べさせるパンとミルクがすべて尽きそうな危機もあったことが「事業報告書」には詳細に記載されている。しかし、ミュラーの「祈りに応じて」必要な食事が、その度ごとに見知らぬ人から夜中に届けられるなどの「マナとして与えられた」エピソードが事業報告書には幾度も記されている (Müller, Narrative & Autobiography)。このような難局がたびたびあったが、彼の生涯の一世紀にわたって、子供たちの食糧は一度も尽きることなく、のべ 10,024 人の孤児を養い得たことは、現代の措置費で賄われる日本の児童養護施設の観点からすれば異次元であり、「奇跡」的な事業であったとされている (Pierson, 1899 ; Müller, Narrative & Autobiography)。

## 2-5. 世界宣教

晩年の 70 歳を過ぎた 1875 年からミュラーは、孤児院事業の一切の責任を実の娘のリディア (Lydia, 1832~1890) とその夫ライト (James Wright, 1837~1905) に委ねて、若い頃からの念願であった世界宣教の旅に出かける。死の直前の 1880 年代までこの巡回伝道は続けられ、その旅路はすべて換算すると 20 万マイル (30 万キロ)、42 か国を船と鉄道で走り回り宣教した。今のように飛行機もない時代であるから地球 8 周分相当になるというその総距離だけでも驚異的である。(Müller, Narrative & Autobiography)

1886 年には、船路で日本に 80 歳を超えて訪問し、新島襄の招きで同志社でも講演している (木原, 1999)<sup>(2)</sup>。この講演内容が石井十次、山室軍平の人生を決定的に変える転機になったことはすでに明らかにしてきたところである (木原, 1999 ; 木原, 1993)。その世界宣教には英、独、仏語を流暢に使いこなすことができたミュラーの言語的才能が役立ち、それが用いられたと言われているが、晩年、彼の事業の成功の秘訣を尋ねられたときの一言は、「私自身が、自分自身を神に完全に明け渡すことを学んだ時以来、自分自身に対して死ぬこと、つまりはジョージ・ミュラーに対して死に、世界に対しても死ぬということ・・・」(“There was a day when I died, utterly died ; . . . died to George Muller . . . died to the world . . . and since then I have studied only to show myself approved unto God.”) (Pierson, 1899 : 367) であるが、この言葉は、彼の人生そのものを象徴している格言のようでもある。(Müller, Narrative & Autobiography)

### 3. フランケの孤児院事業および敬虔主義

さて、ミュラーの生きた時代から遡ること約 100 年前、ミュラー自身が学んだ同じハレの地で、特にハレ大学神学部を舞台にして、ミュラーの事業とほぼ同一のミッションによる孤児院事業がすでに展開されていたことは注目すべきである。それはフランケという人物によってなされていたものである。以下では、このフランケおよびその敬虔主義というものについて明らかにしていきたい。

#### 3-1. 敬虔主義

敬虔主義（独語 Pietismus；英語 pietism）とは神学上の一つの用語である<sup>(3)</sup>。辞書的には、「17 世紀後半から 18 世紀前半にかけてドイツのプロテスタント教会に興った強力な信仰運動。三十年戦争の悲惨な体験がきびしい罪意識を生み出し、真に福音的・ルター的な信仰の再起をうながした。16 世紀の〈宗教改革〉の結果が主知主義的正統主義となり、教会は領邦教会として形骸化していったとき、いわば新たな宗教改革が意図されたのである。宗教改革は〈信仰義認〉を唱えたが、敬虔主義の標語は〈生きた信仰・再生〉であった。」（平凡社世界大百科事典 第 2 版）と説明されているとおりである。

17 世紀末に宗教改革発祥の地ドイツでは、宗教改革から 1 世紀を経て、その改革の息吹や新鮮味が失せ、ルター教会自体も事実上の国教会となり、国家権力のもとに世俗化してきていたという背景があった。それを危惧して教会内におこったキリスト教の信仰復興運動、あるいはそのための改革運動が敬虔主義であったと理解できる。ルター派の教会の形式主義・知識偏重主義に抵抗し、宗教改革者ルターの真髄であった「聖書中心主義」を再現（リバイバル）させつつ、それを更に内的な敬虔と実践を重んじたところにその特徴がある。猪刈由紀によると、「教義の純粹さに重きを置いて神学論争に終始しがちな神学者・聖職者と、義認に通じる信仰を内面的問題としてのみ考え、生き方の問題としてとらえない教会の在り方に対する、近世プロテスタントの変革運動」（猪刈, 2016:92）という捉え方は、この運動の性質を的確に捉えていると思われる。つまり、敬虔主義では、信仰の内面からの「再生」「回心」がとりわけ重要視され、それに伴う確かな行動が求められた。この点について、ヴェーバー（Max Weber）の『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』（*Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*）のなかでも、予定説を信奉するカルヴァン主義のピューリタンの類型との対比で、クエーカー、メソジストなどととも敬虔主義派が分析対象として例示されていることは注視すべきである。この点について、猪刈によれば、敬虔主義は、ヴェーバー

が資本主義の精神の典型的パターンであると指摘したカルヴァン主義と共通点もあるが、基本的にはその思想が異なっているという。つまり、敬虔主義は「内向性、神秘主義、また感情的傾向など「非合理的」要素も見られ、また救いの教義では予定説をとらなかつたために、のちにいわゆる資本主義的エートスを生み出すような心理的エネルギーと起動力を徹底、かつ完成した形で本質として持ち得なかつた一類型」（猪刈，2016：93-94）という指摘の通りである。

また、この敬虔主義の運動は、国家と教会が結びつく国教会化の権力の流れに対する抵抗と反動であったことも理解できる。実際、宗教改革後のドイツではルター派が国教会として位置づけられ世俗化している状況にあった。このことへの反動と痛烈な批判がその運動の背景にはある。具体的には、制度的な教会とは別に自由な敬虔な信徒集会（*collegia pietatis*）、あるいは家庭的な小さな単位での「聖書集会」（聖書研究会）を各自がもつことが実際的な特徴であった。

既存の主流派教会はこの動きに対して警戒し、むしろそれを異端視して徹底的に弾圧をしていった。この敬虔主義運動の主導者の一人がフランケ（August Hermann Francke, 1663～1727）である。厳密に言うと、フランケはいわば第二世代の敬虔主義思想家であるが、他には、フランケが強い影響を受けた第一世代のヤーコブ・シュペナー他、ツインツェンドルフ、ベンゲル、エティンガーらがこの系譜に数えられ、ドイツ観念論、ロマン主義への影響も大きいと言われている。

### 3-2. 『履歴書』

それでは、その主導者であるフランケとはどのような人物であったのであろうか。人物事典などでは、ドイツの敬虔主義の神学者、牧師、福祉事業家、孤児の家の創設者、教育者などと記されているが、主にヘブライ語の聖書解釈学の学者としても大きな業績を残したハレ大学の教授でもあった。

学生時代に神学者シュペナー（Philipp Jakob Spener, 1635～1705）の感化を受けて、回心（1687）を経験したことがきっかけでルター派教会の世俗化と制度に懐疑しはじめ、敬虔主義的キリスト教の精神に傾倒するようになる。このことが、主流派から圧迫される原因となり、彼は教会内部に位置しながらそれに耐えつつ生きてきた。実際にはエルフルト教会の副牧師を解雇されることなども経験している。後に支持者を得て聖書に基づく集会をハレの地で展開するようになる。これにより、ハレという都市が敬虔主義の聖地となったと言われている。それは後に全ヨーロッパを越えて北アメリカ、南アフリカにまで広がり、インドへも広がっていった。彼の功績は敬虔主義に基づく生きた信仰による再生と、それに基づく聖書の読み方を促し、市民層に伝播させキリスト教界の内面的改革を行ったことがあげられる。そして貧民や孤児のためのフランケ学園（孤



児院、学校、他薬局など）を形成して信仰の実践をなした。

以下では、フランケの生涯について、伊藤利男（2000）『孤児たちの父フランケ』（鳥影社）に基づいて論じていくことにするが、この著作は、数少ないフランケ研究のなかでも、その時代背景とともに原資料に基づいたフランケの生涯と思想を丹念に追った研究書である。その点で、猪刈由紀の研究（2016）とともに先行研究のなかでも際立っており、稀少な文献である。

フランケは、自らの前半生を振り返り、28歳のときに『履歴書』（1691）を記している。ここで『履歴書』と記しているが、これはフランケの肉筆原稿であり、現在でもそのままハレ学園文章館に保管されているものである。実際には第三者の手によって、長文であるが『前にエルフルトで副牧師を務め、そこで極めて不当に罷免されたのち、ザクセン・ブランデンブルグ選帝侯国のハレでヘブライ語の教授をし、市外のグラウハで牧師を務める A・H・フランケ氏の履歴書』という正式タイトルで公開され、のちに『A・H・フランケの自ら記述した回心の発端と経過』として出版されて一般に流布させるようになったものである（伊藤 2000:100）。後述するがミュラーはこれを手にして読んでいると思われる。以下、ここでは『履歴書』と略記する。

このような文章を書き残すスタイル、あるいはその手法自体、ミュラーに影響を与えたと考えられる。というのはミュラーも、先述したように“The Life of Trust: Being a Narrative of the Lord’s Dealings with George Müller”という事業の記録および自叙伝的半生を記録として公開し、自らの回心と孤児院事業が神の取り扱いによるものであることを克明に記して、それを世に問うているのである。日本の石井十次も「日誌」を克明に記し、また事業報告書を残しているが、実はこれはミュラーのスタイルを模倣したものである（木原、1998）が、更に遡るとそのルーツはフランケにあったということになる。

さて、この「履歴書」に基づき以下、フランケの生涯をミュラーとの類似点に注視しつつみていく<sup>(4)</sup>。

### 3-3. 回心

フランケは1663年、法律家の父ヨハネスと市長の娘であったアンナのもとに生まれるが、7歳のときに父を亡くす。両親や姉よりルター派のプロテスタント的な宗教的教育を受けるが、青年期には「俗世と虚栄のなかへ巻きこまれて、キリストからますます離れていく」（履歴書＝伊藤 2000:106-107）「神学を頭の中に詰めこんで、心の中には取り入れなかった」（履歴書＝伊藤 2000:107）と記すように牧師や神学者を目指して神学を学ぶ当時の文脈ではいわゆるエリート・コースを歩んでいた道とは裏腹に、その内面は、生きた信仰とはかけ離れていたと述懐する。そのような折に学内で開かれた

「聖書愛読ノ集会」(collegia pietatis)に参加するようになる。そこでは知識としての聖書の学びではなく、神の語りかけに注視し、実際の信仰の在り方、生き方を学ぶようなものであった。彼のなかでの疑問として、実際には大学で神学を学び、教会で説教すらしながら、「つまり自分にはまだ真の信仰がないということが、しだいに私の胸にこたえてきた」(履歴書=伊藤 2000:115)ということであった。そして「神を信じていない」という半ば強迫的な観念に促され、「心はひどく不安になって」「この苦難が私の目からたくさんの涙をしばりとった」との自覚を記しているように日々苦悶するようになっていったことが「履歴書」には赤裸々に綴られている。そしてひとり跪き「もしどなたか本当の神様がいらっしゃるならば、どうか私を憐れんでください」と何度も繰り返してし苦悩のうちに呻きながら祈ったというのである。(履歴書=伊藤 2000:116)

このような土壌のなかで知識としての神学の学びから内的な信仰へと大きく変化していく。そしてついに彼は「生ける神」を見いだし、そして回心したという。それは以下のとおりの生々しい経緯である。履歴書の独白的文章を伊藤訳に従ってそのまま引用する。

「翌日、それは日曜日だったが、私は今までどおりの不安の状態にいたので、すぐに床に横たわろうと思い、また、もし何の変化もおこらなかったならば、改めて説教を断ろうと考えた。不信仰のまま、自分の心に反して説教を行ない、そのために人々を欺くことはできなかったのである。というのも、心が抛り所とすることのできる神をもたないということは、いったいどういうことなのか、私はあまりに激しく感じたからである。自分の罪に涙を流しながら、それが何故なのか、その涙をしばり出させるのは誰なのか、(中略)

もしまことに神が存在したもうならば、この悲惨から救いたまえと叫んだ。すると、主は生きた神は、私がまだひざまずいているまに、聖なる玉座から私の願いを聴き入れたもうた。(中略)拳を翻すかまに、私の疑惑は消えうせ、私は心の奥底でイエス・キリストにおける神の恩寵を確信した。私は神をただ神と呼ぶだけでは満足できなくて、私の父よ、と叫んだ。心のあらゆる悲哀と不安はいちどきに取りさらされて、私はとつぜん歓喜の奔流をあびせかけられたかのようにだった。」(「履歴書」=伊藤訳 2000:117-118)

若きフランケの信仰告白であると同時に、当時の世俗化していた教会に真摯に神の前の「単独者」として生きようとするひとりのドイツの青年の貴重な歴史的証言であるとも理解できる。

そして、以下は、「履歴書」の最後を締めくくる一節である。

「(回心したとき)以来、私のキリスト教信仰は不動のものになった。それ以来、神意にかなわぬ生活態度と世俗的欲望をすてて、思慮深く、正しく信心ぶかくこの世に生活することが私には容易になった。それ以来、私は常に神のがわにつき、昇進、栄誉、世の名声、富貴、楽しい日々と外面的な俗世の快樂をとるにたらぬものと見なした。そして以前は学識を偶像

視していたのに、今は信仰は、芥子のたねの一粒と同様に、百の袋いっぱい詰まった学識よりも価値があるということ、そしてガマリエルのもとで学んだ知識のすべては、私たちイエス・キリストを知ることの無尽蔵に比べれば、塵あくと見なされなくてはならない、ということが分かった。」（\*筆者注 ガマリエルは、パウロの回心前のユダヤ教の律法学者時代の師であり、当時のイスラエルで尊敬されていた人物である）（「履歴書」=伊藤訳 2000: 119-120）

### 3-4. フランケ学園

このような経緯を経て、フランケは、特に敬虔主義の思想をもとに1692年にハレ大学教授兼聖ゲオルク教会牧師としてハレの街へ赴任してきた。そこで、それらの職務の傍ら、「聖書の集会」(collegia pietatis)に基づく小さな敬虔主義のコミュニティを広めていくことに尽力する。後にその信仰の証しとして、また実際の信仰の結果としての行動として、貧しい家庭の子供、孤児たちの教育と福祉の施設創設に目覚めるようになっていく。

そしてまずは1695年にはグラウハに「孤児の家」をつくることになる。この「孤児の家」こそが、それ以降ハレ派の敬虔主義運動の拠点ともなっていくとともに後にミュラーのモデルとなるものである。そして、相次いで貧しい者たち、生活困窮者、孤児のための幾つもの附属施設、関連施設（主に孤児院、学校、印刷所、薬局、聖書研究施設）が建てられていく（伊藤 2000: 23）。後にこれら施設全体を通称「フランケ学園」と呼ぶようになるが、厳密には「ハレ・フランケ財団」(Franckesche Stiftungen) という名称である。1697年の時点では、施設数が23を超え、およそ500人の子供たちが27クラスに能力別に分かれて授業を受けていた（猪刈, 2016: 97）。この福祉事業こそが1世紀を経て先述したようにミュラーのモデルとなり原型となるものである。彼の死後残された銅像には「アウグスト・ヘルマン・フランケ、この人は神を信頼した」（伊藤, 2000: 25）と記載されているが、その特徴は、国家にたよる福祉事業でもなく、世俗的な博愛事業でもなく、ただ神の栄光のために、自らの信仰の証明として生ける神が働いてなした事業であると、受けとめているという点である。このような召命観とその事業は、フランケとミュラーの二人は酷似している。

## 4. ミュラーとフランケの歴史的邂逅

ドイツのハレで敬虔主義の実践として孤児の家（フランケ学園）を設立するなど活躍したフランケが1727年に世を去って100年が経つと、フランケらが主導した敬虔主義運動はその中心地であったハレにおいてもすでに下火となり、再び世俗化の波がその地を覆っていた。

1825年に奇しくもそのハレの地に、かつて敬虔主義の中心となったハレ大学神学生として入学してきた一人の青年がジョージ・ミュラーであった。先述した通り、ミュラーも入学動機は名誉と職業的安定としての国教会牧師職を求めて、あくまで親のすすめでその道を歩んだのであるが、これもフランケの職業観のパターンとまったく同じであった。その彼が、わずかに残った灯のような敬虔主義の小さなグループ「聖書の集会」に一人の友人に誘われて参加したことを契機に、彼は回心を経験するに至ったことは先述した通りである。つまり、そこで神の前に跪き素朴に祈っている真の信仰者の姿に触れたことが人生の転機となったのである (Müller, Narrative & Autobiography)。ミュラーは、大学で神学生として神を語り、神を教えている自分自身には「本当の」信仰がないことをこの「小さな聖書の集会」で集う信徒たちの信仰との対比で自覚することとなり、苦悶した挙句に「本当の回心」を経験したと述べている。この経験は、ハレという場所もさることながら、先述したフランケの体験とも酷似している。つまり職業としての聖職者を目指す神学生が、「実は神を信じていない」ことに悩み、そこに苦悩し、そしてついに神を見いだして回心するというパターンである。そこでの神は、机上の知識の神ではなく、「生きた(父なる)神」との出会いという経験であったというのも共通している。

実際に、ミュラーは、回心後、宣教師になることを決意したことに反対した父との反目と親からの経済的支援がなくなったことに起因して3ヶ月間当時のフランケ学園の一室を学生寮として利用してそこで暮らしたという経験をもっている。まさに物理的にもその運命的な出会いが胎動していたのである。

ミュラーの伝記を書き、生前からミュラーとも交流があったピアソン (Arthur Tappan Pierson) は、その経緯を、「半ば無意識にのうちに (half unconsciously)、ミュラーのブリストルの全生涯は、ハレのフランケの孤児院からの教えとパターン (its suggestion and pattern in Francké's orphanage at Halle) から得た」(Pierson, 1899: 46) と述べている。その教えとは、フランケの生涯において、「生きた神だけがただ祈りに応えてくださる方であり、孤児のための家を用意してくださる方であるという、実際に目に見える、はっきりとした確実な証拠」(a visible, veritable, tangible proof that the Living God hears prayer, and can, in answer to prayer alone, build a house for orphan children.) を示してくれたことであると述べている。また、ピアソンは、「どれほど、彼(ミュラー)の信仰の働きは、フランケの祈りに導かれた単純な信頼という生き様に負うところが大きかったことかと、ミュラー自身が、述懐していた」と述べている (Pierson, 1899: 46)

事業報告書の記録によると、ミュラー自身は1833年の2月9日に「フランケの伝記」(a part of Francké's life) を読んだと述べている。つまり、これは彼が回心を経験して、ハレでフランケを知ってから数年後のことである。恐らくそこで読んだ「伝記」という

のは先述したフランケの書いた自叙伝的「履歴書」のことであろう。当然ながらドイツ語はミュラーの母国語であったのでフランケの「履歴書」を原文でじっくり読んだのであろう。以下、重要な箇所であるので、注では英語原文とともに引用しておく。

「1833年2月9日：私はフランケの伝記を読んだ。主は、彼がキリストに従ったごとくに恵みをもって導かれて、私もフランケに従うように助けてくださった。私たちがブリストルにおいて知っている主の民（クリスチャン）の多くは、貧しい人々である。もしも主が私たちに、かの親愛なる神の人（フランケのこと）が成したように恵を賜ることがあるのならば、天来の助けにより、今以上に更にその取り組みに注視したい。」（Müller, Narrative & Autobiography, *The Müller, George Collection*, No.1096）<sup>(5)</sup>

実際に、その3年後に、この日誌に示されたように、ミュラーはフランケの足跡を辿りつつ、ブリストルの地で、孤児院創設を実現していくことになる。つまり、敬虔主義との出会い、そして回心に続き実際的な実践行動の証しとしての孤児院事業構想がごく自然の流れのようにミュラーのなかに沸き起こってきたのはこのフランケの伝記、生き様、その信仰に触発されたと考えるのは当然なことである。なぜなら彼をハレの同郷であり、先輩であり、尊敬するキリスト者の模範、孤児院事業の先駆者と考えたからである。

更に、世界宣教に旅立っていた1876年3月28日（71歳）、後妻となるサンガー（Susannah Grace Sanger）を伴ってドイツへの宣教旅行中にハレを再び訪れている。（先妻グローブスは、すでに亡くなっている。）そこで、フランケの孤児院のホールの説教壇に立ち、「ヘブル人への手紙11章4節」から「信仰」について聴衆にメッセージを語っていることが記録されている。（Müller, Narrative & Autobiography, *The Müller, George Collection*, No.10156）<sup>(6)</sup>

また同年の3月30日にも同じフランケの孤児院ホールで、今度は「祈り」について奨励メッセージを語っている。そこでは特に、フランケの生涯と事業を振り返りつつ熱弁を振るった様子が記録されている。なぜなら、「フランケこそが、神のみに一切の助けを求めて、神のみに頼るキリスト者の信仰の生涯の模範であり、自らがブリストルにおいて孤児院を開設するとき大いに励まされた」（この筆記者は妻であると思われる）と述懐したのである。（Müller, Narrative & Autobiography, *The Müller, George Collection*, No.10156）<sup>(7)</sup>

## 5. 結 論

ジョージ・ミュラーの孤児院事業の着想は、彼の信仰面を強調するあまりに、あたかもミュラー自身の閃きや神からの啓示であるかのような紹介がなされる傾向にあった。

しかしこれまで論じてきたように、フランケがハレという土地に100年前に蒔いた敬虔主義の種が、1世紀を経て萌芽し、直接的にも間接的にもミュラーに影響を与えていることは明らかである。つまり、ミュラーは、フランケに影響され、それをモデルにしてブリストルにおいて「再現」させ、それを「実験」したという説明のほうが社会事業史的には適した表現といえる。

以上のことから、ミュラーのブリストルの孤児院の事業には少なくとも一つの原型があったと言える。またそれは単に孤児院という事業面でのモデルだけではなく、ミュラーの生涯における信仰そのものの模範であり、ロールモデルでもあった。

二人は一世紀以上の時代的違いがあるが、以下の5つの点で、酷似したパターンをもっている。

- ①ドイツ（プロシア）のハレという都市、そしてハレ大学神学部というアカデミックな場所、を舞台（出発）としていた点、
- ②「職業としての牧師」である自分自身が、「信仰をもっていない」ことに苦悩し、そこから「回心」して、「生けるまことの神と出会う本当の信仰」をもって、「真の」キリスト者となるという敬虔主義側面をもっていた点、
- ③その信仰を証しするべく、実践的な行動に移し、その生きた信仰の証明として孤児院事業に尽力して、それぞれドイツ（ハレ）、イギリス（ブリストル）において歴史に残るような甚大な事業をした点、
- ④（独・英）の国教会という主流派から離れて、小さな「聖書の集会」を拠点とした敬虔主義（ミュラーの場合はブラザレン運動）に根付いた活動を展開していった点、
- ⑤自らの信仰の証明として、詳細な記録「履歴書」「物語」「自叙伝」を書き記して実証的にアピールした点、である。

以上論じてきたように、ブリストルの孤児院創設者ジョージ・ミュラーの思想形成上にはフランケとその敬虔主義の影響があることは明らかである。つまり、ミュラーの自叙伝や事業報告書、日誌等に残された原資料を丹念に吟味すると、彼の孤児院事業開設への着想の原型はフランケと彼が創設した一連の孤児院事業であったと言える。しかし一方で、見方を変えれば、そのこと自体を「摂理」と考え、「神の見えざる手」がハレという舞台で紡ぎ出した「物語」であったと考える人がいたとしても当然なほどに、その繋がりには特異であり不思議でもある。

それを「摂理」と呼ぶかどうかは各自の判断に任せるにせよ、時代的にはおよそ一世紀以上の差があるものの、敬虔主義という思想がドイツのハレを舞台にして、ミュラー

とフランケという二人を結び合わせたことは事実である。そして、この歴史的邂逅が社会事業史のなかで果たした影響は、期せずして石井十次、山室軍平らにも強く及ぶこととなり、日本にもはかりしれないほど重要なものとなっていったということも忘れてならない。

#### 注

- (1) Müller, *Narrative & Autobiography* は、オリジナル版を編集したペーパーバック版にもなって幾つかの版があるが、本稿での参照・引用は、基本的に膨大な 2000 頁近くの資料集である電子版 *The George Müller Collection* (2011) からである。したがって、頁数の代わりに、電子版のナンバーリングを振っている。
- (2) ピアソンは 2 度にわたって日本を訪問したと記録 (Pierson, 1899: 353) しているが、この点、事業報告書と記載が異なるので、ミュラー財団の資料館に直接事実関係を確認したところピアソンの誤認であり「一度である」という返答であった。
- (3) 敬虔主義の表記は、通常、ピエティスムス (独語 Pietismus)、ピエティズム (英語 pietism) であり、学術的にはカタカナ表記が一般的であるが、本稿では英独両国にまたがる議論をしているので、本稿では「敬虔主義」と表記している。
- (4) なお「履歴書」については、伊藤利男 (2000) が主要な部分を正確に翻訳しており、本稿ではその翻訳文章を原則としてそのまま使用している。
- (5) 重要な部分なので原文を記すと以下の通りである。February 9, 1833. I read a part of Franke's life. The Lord graciously help me to follow him, as far as he followed Christ. Most of the Lord's people whom we know in Bristol are poor, and if the Lord were to give us grace to live more as this dear man of God did, we might draw much more than we have as yet done out of our heavenly (Müller, *Narrative & Autobiography*, *The Müller, George Collection*, No.1096)
- (6) 重要な部分なので原文を記すと以下の通りである。On March 28th we left Cassel and went to Halle, . . . At 9 in the evening we reached Halle. The next afternoon Mr. Müller spoke at the great Hall of Francke's Orphan Institution from Heb. xi. 4, (Müller, *Narrative & Autobiography*, *The Müller, George Collection*, No.10156)
- (7) 原文は以下の通りである。March 30th gave an address on prayer at the same Hall, upon which occasion he made particular reference to the life and labours of Francke, because the example set by that devoted servant of Christ of founding an Orphan Institution, in dependence upon God alone for help, was a great encouragement to him when he began his Orphan Work in Bristol. Whilst at Halle we went through the Orphan Asylum, founded by Francke in 1698, and visited the different departments of the Institution. (Müller, *Narrative & Autobiography*, *The Müller, George Collection*, No.10156)

#### 参考・引用文献

- Coad, Roy (1976), *A History of the Brethren Movement*, 2nd ed. Exeter: Paternoster Press.
- Francke, Hermann August (1709) *Segensvolle Fußstapfen*.
- Müller, George (2011) *The George Müller Collection: Autobiography; Answer to Prayer: Counsel to Christians; Preaching Tours and Missionary Labours* Kindle Edition.
- Müller, George (1996) *The Autobiography of George Müller*, Mass Market Paperback (Originally Entitled, "The Life of Trust: Being a Narrative of the Lord's Dealings with George Müller")
- Müller, George (2017) *Answers to Prayer*. Paperback A. E. C. Brooks
- Pierson, Arthur Tappan (1899) *George Müller of Bristol*. London: James Nisbet & Co.
- Steer, Roger (1997) *George Müller: Delighted in God*. Tain, Rosshire: Christian Focus.
- Max Weber (1934) *Die Potestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, Mohr, Tübingen.

George Müller の資料館公式サイト Müllers : <https://www.mullers.org/>

伊藤利男 (2000) 『孤児たちの父フランケー愛の福祉と教育の原点ー』 鳥影社.

猪刈由紀 (2016) 「ハレ・フランケ財団 (シュティフトウンゲン) における救貧と教育: 社会との距離・神との距離・積極性」『キリスト教史学』 70.

木原活信 (1999) 「ジョージ・ミュラーが石井十次に及ぼした影響」同志社大学人文科学研究所編『石井十次の研究』 同朋出版.

木原活信 (1993) 「同志社のアイロニーーー山室軍平の中途退学ー」『新島研究』 第 82 号.

なお, 本研究は JSPS 科研費 JP 15K03980 の助成を受けています。



---

George Müller and August Francke :  
A Historical Encounter with Pietism in Christian Social Welfare in Halle

Katsunobu Kihara

---

In this article, I will reveal the influence of August Hermann Francke (1663-1727) and his Pietism on the ideological formation of George Müller (1805-1898), the founder of Bristol's orphanage. Previous studies have pointed out that it may have been a mysterious phenomenon (as a "direct revelation" from God) due to Müller's distinctive worldview. However, careful examination of Müller's diary and the remaining source material such as *Müller, Narrative & Autobiography*, shows that his idea of opening the orphanage was not necessarily a mysterious thing. The original prototype for Müller's orphanage was Francke's orphan project in Halle, although there was a gap of more than a century between them.

**Key words** : George Müller, August Francke, Bristol's orphanage, Christian social welfare, Pietism

